様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　２１年　５月　２６日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：18530117
研究課題名（和文）人種問題をめぐる日本と英米の外交関係―英連邦と米国における日系移民問題を中心に―
研究課題名（英文）Japan’s diplomatic relations with Britain and United States over the racial question-focusing on Japanese immigration issue in the British Commonwealth and United States-

研究代表者
松本佐保（MATSUMOTO SAHO）
名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・准教授
研究者番号:40326161

研究成果の概要：
本研究補助金の成果として、
研究代表者は、英国における国際関係史学会で、18 年度に The Yellow Peril and the Russo-Japanese war-The Racial question and Anglo-Japanese relations-, 19 年度に Japanese Pan-Asianism and the West, 1894-1919, 20 年度に Australian defense policy and White Australian policy, 1901-1921 という題目で三回学会発表、また日本では日本オーストラリア学界で 20 年 6 月に「オーストラリア移民規制問題と大英帝国の問題、1894-1924 年」という課題で白豪主義と日系移民の問題について成果発表を行った。本発表はインドという英国にとって重要な植民地からの白人自治領への移民問題がインド・ナショナリズムを生み、これが後にインドがアジア主義運動に関わるきっかけになったなど、次なる研究への発展にもつながった。なお、The Yellow Peril and the Russo-Japanese war-The Racial question and Anglo-Japanese relations-は『中京大学紀要』(2007 年)、Japanese Pan-Asianism and the West,1894-1919 は『東北学院大学紀要』(2008 年）に論文として、オーストラリア学会での報告は『西洋史学』（2008 年）の学会発表報告という形で掲載された。またこれら成果の集大成として、英国の高水準の学術書出版社と知られるオックフォード大学出版会から共著、*The Diplomats’ World, a cultural history of diplomacy, 1851-1914* として 2008 年の 12 月に出版された。以上の経緯から本研究は人種問題を国際関係などの政治・外交研究において位置付け、外交文化史研究という新しい研究分野を切り開き、学会への多大なる貢献となった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,200,000	0	1,200,000
2007 年度	800,000	240,000	1,040,000
2008 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	660,000	4,060,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：政治学・国際関係論
キーワード：外交史・国際関係史

１．研究開始当初の背景
従来の日系移民研究が、社会学的あるいは社会史研究としてなされてきたのに対し、これを外交・安全保障などの国際関係論の観点から捉えなおす点が本研究の起源である。それでも日米関係研究においては人種問題が

すでにかなり議論されてきたが、これに対し日英関係研究における人種問題については、殆ど研究が行われていないのが現状である。その理由として英国そのものへの日系移民の問題が存在しないことも一つだが、特に日本における従来の日英関係研究は日英同盟破棄後も英国による対日本宥和政策あったとする楽観史観が中心であり、それゆえエスニシティなどの人種的問題が両国対立の要因になったという視点は欠如している。

しかし実際にはカナダ、オーストラリアにおける排日移民政策が、宗主国である英国の対日外交に影響を及ぼしたと考えられる。イギリス帝国防衛にとってオーストラリアは特に太平洋の軍事・安全保障上重要な拠点であることから、オーストラリアにとって「白豪主義」政策が英国の対日本外交を規定する要因になったのである。それゆえ米国の対日系移民政策を外交問題として扱った既存の研究を踏まえつつ、カナダ、オーストラリアの対日系移民政策を、宗主国であるイギリスとの外交関係、また「黄禍論」などの人種問題として扱った研究を行うことは大変重意義があると考えたのが、研究開始当初の背景であった。

２．研究の目的

近年国際関係史を文化的側面から研究する動向が見られるが、本研究はそうした流れをくむものであり、具体的にはカナダ、オーストラリア、アメリカ合衆国における日系移民問題を、国際関係論の枠組みで歴史的に分析することを目的とする。いわゆる移民研究の社会学的分析ではなく、移民問題が外交や安全保障政策にいかなる影響を及ぼしたかと明らかにするものである。太平洋を挟んで日本と英連邦（カナダ、オーストラリア）・米国との間に展開した人種問題が、いかに英米の対日外交政策を決定し、やがて第二次世界大戦へとむかうことになったかを明らかにするものである。

人種問題と日米関係については、すでに幾つか研究が存在し、排日移民法と日米開戦について扱った研究分担者廣部泉著 *Japanese Pride, American Prejudice: Modifying the Exclusion Clause of the 1924 Immigration Act* (Stanford University Press, 2001)や、簑原による『排日移民法と日米関係』(岩波書店、２００２年）などがある。しかしこれらはあくまで米国を中心に論じられたものである。しかし実際には米国よりずっと前から、オーストラリアでは白豪主義がすでに１９０１年にはじまり、日系移民を含む有色移民排斥政策として施行されていた。

オーストラリアにおける排日移民法などに関する研究としては、Sean Brawley, *The White Peril, foreign relations and Asian Immigration to Australasia and North America, 1919-1978* (UNSW Press, 1994)が代表的な研究としてあげられ、オーストラリアの白豪主義の政策を中心にしながら、カナダや米国の北米の政策にも言及し、１９１９年のパリ講和会議に日本が提出した人種平等条項の否決から太平洋戦争勃発、そして戦後に至る時代を扱って論じている。オーストラリア首相、ビリー・ヒューズの「働き者の有色人種の兄弟は去れ、戻ってくるな。」という演説はあまりにも有名である。ただオーストラリアの白豪主義に基づくアジア系移民排斥は、すでに１９世紀末から始まっており、１９０１年に導入された移民制限法によって本格化したので、本研究プロジェクトでは１９０１年から大戦勃発の１９４１年を研究対象とした。

カナダでもすでに日系移民を含む有色移民ついては議論されており、問題についての代表的研究としては、Patricia Roy, *A White Man’s Province, British Columbia politicians and Chinese & Japanese Immigration, 1858-1914* (University of British Columbia Press, 1989) があり、１９０７年に起こった日系移民を対象とした人種暴動である、バンクーバー暴動などを扱っており、こうしたブリティッシュ・コロンビア州における問題がやがてカナダの国家レベルでの対日外交に影響を及ぼすことになることが論じられている。排日移民政策の傾向を強めていくのも、近隣国である米国の移民政策とある程度連動している可能性もあり、本研究プロジェクトはこの問題についても考察を行った。

１９１９年のパリ講和会議に日本が提示した人種平等条項をめぐる、日本と欧米列強の国際関係については Naoko Shimazu, *Japan, Race and Equality: The Racial Equality Proposal of 1919* (Routledge, 1998)がある。

これは米国大統領ウィルソンが国際連盟形成にあたって民族自決や人種平等の理念を唱えたことから、日本が人種平等条項に希望を託くすが、結局英米の反対によって本条項は葬り去られる外交交渉の過程を詳細に研究している。この英米の人種平等条項拒否の背景には米国やカナダ、オーストラリアの排日移民政策があることも触れられているが、カナダ、オーストラリアの移民政策をめぐる英国との関係については詳細に言及さ

れているとは言えない。
特にカナダ、オーストラリアは英連邦として、イギリス帝国の外交方針にある程度従うことを強いられながらも、その地理的位置づけから米国と類似のあるいは、より厳しい排日移民政策をとるようになった。特に日英同盟の時代はオーストラリアやカナダは難しい選択を迫らせ、また日系移民問題は英米の外交関係にも影響を及ぼした。太平洋戦争の起源を、戦間期より日露戦争や日清戦争などより時代をさかのぼって研究する最近の研究動向を踏まえながら、日本の台頭や大アジア主義に対する英米の脅威を、太平洋地域における日系移民の問題を通じて考察した。また大アジア主義や日系移民への脅威という問題を、「黄禍論」などの人種問題やメディアが報じた白人からみた日本人イメージなどの文化的視点も考慮に入れて論じた。
人種問題など従来国家間の外交関係や国際関係研究で明らかにされていなかった課題を明らかにするのが本研究の目的である。

３．研究の方法
研究代表者である松本は本研究の立案、実行及び研究の総括を担当、研究分担者であった廣部は研究の実行において、特に米国における日系人の問題について担当し、その研究分担方法が、相互補完的になる工夫がされた。
具体的には初年度、１８年度は本格的の基盤を形成することを目的とし、本研究テーマに関する文献・資料を収集し、データ・ベースの作成をするとともに、国内外への調査旅行を通じて、本研究テーマに関わる研究を行う研究者と意見交換を行った。研究代表の松本は、ロンドンの英国国立公文書間館、そしてオタワにあるカナダ国立公文書館、キャンベラにあるオーストラリア国立公文書館に、また研究分担者の廣部はワシントンにある米国国立公文書館のみならず、カルフォルニア州やニューイングランドにある商工会議所や日系人協会などの民間の文書館での資料収集を行った。また研究代表者の松本は名古屋、分担者の廣部は札幌を勤務地とするため、相互の研究打ち合わせを名古屋か札幌で行うか、あるいは東京大学大学院総合文化研究科付属アメリカ太平洋地域研究センターにおいて移民関連資料収集の機会にあわせて打ち合わせを行うことも可能であった。平成１９・２０年度は研究代表者である松本は、研究会などに積極的に参加し、日英関係、日米関係、国際関係、イギリス帝国史研究（主にカナダ、オーストラリア研究）、移民研究などの分野の研究者との交流によって、その問題関心、研究方法、研究史上の位置づけ、新史料の発掘などに関して情報交換と議論の場を設けた。そのため図書・資料購入費として消耗費、国内外の旅費、資料複写費が必要であった。
海外の学会でも成果報告を毎年積極的に行い、その成果を紀要論文に掲載、平成２０年度にはその集大成を海外の研究者との協力で、共著という形で英国の出版社から出版した。

４．研究成果

研究代表者は、英国における国際関係史学会で、１８年度に The Yellow Peril and the Russo-Japanese war-The Racial question and Anglo-Japanese relations-, １９年度に Japanese Pan-Asianism and the West, 1894-1919, ２０年度に Australian defence policy and White Australian policy, 1901-1921 という題目で三回学会発表、また日本では日本オーストラリア学界で２０年度６月に「オーストラリア移民規制問題と大英帝国の問題、１８９４－１９２４年」という課題で白豪主義と日系移民の問題について成果発表を行った。The Yellow Peril and the Russo-Japanese war-The Racial question and Anglo-Japanese relations-は『中京大学紀要』(2007 年)、Japanese Pan-Asianism and the West,1894-1919 は『東北学院大学紀要』(2008 年）にそれぞれ論文として、オーストラリア学会での報告は『西洋史学』(2008 年）の学会発表報告という形で掲載された。またこれら成果の集大成として、英国の高水準の学術書出版社と知られるオックフォード大学出版会から共著、*The Diplomats' World, a cultural history of diplomacy, 1851-1914* として 2008 年の 12 月に出版された。
研究分担者は、平成１８年度に「アメリカのナショナル・アイデンティティの危機」アメリカ学会【編】『原典アメリカ史 〈9〉唯一の超大国』、１９年度に共著『２０世紀日本と東アジアの形成』で「日本と汎アジア主義に対する英米の反応」という論文を発表、平成２０年度には「来日アメリカ人の宣教師の越境と日米関係」、「国際連盟知的協力国際委員会の委員選考過程と新渡部稲造」などの論文を発表した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　５　件）
① Saho Matsumoto, Japanese Pan-Asianism and the West,1894-1919,『東北学院大学紀要』（２００８年）査読なし
②松本佐保「オーストラリアの移民規制問題と大英帝国の問題、１８９３～１９２４年」

（「オーストラリアにおける白人性の克服―先住民によるスポーツと移民制限―藤川隆男編」)『西洋史学』(２３１号、２００８年)、７０－７４頁、査読あり
③廣部泉「国際連盟知的協力国際委員会の創設と新渡戸稲造」『北大文学研究科紀要』（１２１巻、２００７年）、１－２０頁、査読なし
④松本佐保、The Yellow Peril and the Russo-Japanese war-The Racial question and Anglo-Japanese relations-『中京大学国際英語学』（３号２００７年)、１～１７頁、査読なし
⑤廣部泉「アメリカのナショナル・アイデンティティの危機」アメリカ学会【編】『原典アメリカ史　<9>唯一の超大国』岩波書店、２００６年、２９６－３０５頁、査読あり

〔学会発表〕(計　４　件)
①Saho Matsumoto,　Australian defence policy and White Australian policy, 1901-1921
（英国国際関係史学会、アルスター大学にて平成２０年９月）
②松本佐保「オーストラリア移民規制問題と大英帝国の問題、１８９４－１９２４年」
（日本オーストラリア学界、追手門大学にて、平成２０年６月）
③Saho Matsumoto, Japanese Pan-Asianism and the West, 1894-1919,
（英国国際関係史学会、リバプール大学にて平成１９年９月）
④Saho Matsumoto, The Yellow Peril and the Russo-Japanese war-The Racial question and Anglo-Japanese relations-,
（英国国際関係史学会、グリニッジ大学にて平成１８年９月）

〔図書〕(計　２　件)
①Saho Matsumoto-Best　(共著)
The Diplomats' World, a cultural history of diplomacy, 1851-1914, (Oxford University Press, 2008) 83-101
②廣部泉（共著）
『２０世紀日本と東アジアの形成』(ミネルヴァ書房、２００７年) 171-189

６．研究組織
(1)研究代表者
松本　佐保（MATSUMOTO　SAHO)
名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・准教授
研究者番号: 40326161

(2)研究分担者
廣部　泉(HIROBE　IZUMI)
明治大学・経済学部・准教授
研究者番号:80272475

(3)連携研究者
なし